

## 電子メディアを活用した書くことの学習の基礎論的考察 —書くことの双方向性と書くことの双向的な学習との接点—

上 田 祐 二

### 1. 問題の所在

国語科の表現指導において、双向的な言語活動を活用した学習展開は、「伝え合う力」の向上を図る手だとしてしばしば用いられるようになってきている。しかしながら、「書くこと」の学習領域において、双向的な言語活動は、学習者個々の書くことにどのように関係するのだろうか。というのも、学習指導要領の領域区分からも見て取れるように、「書くこと」は、「話すこと・聞くこと」ほどには双向的なものとしてとらえられていない。実際、「書くこと」の後に、書かれたものを読み合い、感想を述べ合うなどの双向的な言語活動が置かれるといった展開になりがちである。

その一方で今日の私たちの生活においては、電子メディアの発達に伴って、ネットワーク環境において双向的に書くことが一般化しつつある。そこで書くことは、コミュニケーションにおける他者との隔たりを取り除く。すなわち、電子メディアにおける書くことは、誰かの読むことに向けて書くことと、その誰かがそれに応答することを保証するとともに、場合によっては、そうした双向性を即時的なかたちで実現するのである。

こうした書くことの変容を踏まえるならば、書くことの指導において双向的な言語活動を有効に活用するためには、書くことをその双向性の点からとらえなおす必要があると考える。そこで本稿では、まず、今日の電子メディアにおける双向的な書くことの様相を整理する。次に、コミュニケーションとの相関を踏まえた書くことの機構をとらえる。さらに、その機構を踏まえて、双向的な言語活動が、書くことの学習にどのように生かせるのかを示す。

### 2. 電子メディアにおける双向性の様相と書くことの課題

#### 2.1. 電子メディアにおける双向性の様相

これまで書くことは、書き手において閉じられた機構としてとらえられてきた。たとえばオングは、文字のテクストは脱状況的であり、したがって書くことは独我論的な作業であると述べている。話すことばのことばを送る相手が現前しない状況では、書き手は、まず、読み手を虚構しなければならない。こうした虚構性は、私的な日記においても同様であり、むしろそれは、どのような読者としての私に向けて書くのかという疑問が突きつけられるという意味で、書き手を不安にさせる状況である。さらに、書くことの脱状況性によって、その表現には「正確さと分析的な厳密さ」が必要となる。話すことばと異なり、書きことばの理解をコンテクストに依存させることはできない。そのため、コンテクストの手がかりなしに、テクストを正確に理解できるようにするために、規範的な表現の様式で書くことが必要となるのである<sup>(1)</sup>。

書くことを内省的で精緻な苦行だとするこうした洞察は、書くことによるコミュニケーションの成立

に対して、書き手が負う責任の過剰な重さを示唆している。さらに、そもそもここでの書くことはコミュニケーションであるとも言いにくい。なぜなら、ここでの書くことは、読み手の不在を前提に行われているのであり、その過程において表象されるのは、書き手の虚構した読者像でしかないからである。したがって、書かれたことばは、実際に読まれることを保証されない。仮に、誰かからの応答があつたとしても、それは偶発的な結果でしかない。なぜなら、その書かれたことばは、応答した誰かに向けて確かに書かれたわけではないからである。さらにそうした応答すら、書かれたことばを伝達するメディアがなければ、得ることはまずないのである。このように、望みの薄いコミュニケーションの成立を期待しながら、書くことの孤独な営みに耐えることのコストバランスの悪さが、書くことを私たちの日常から遠ざけてきたとみることもできるだろう。

しかしながら今日の電子メディアの発展は、こうした書くことの様相を変容させつつある。たとえば総務省は、ここ数年で急速に普及したブログの利用実態について報告している。それによれば、2005年3月末時点で、国内ブログの利用者は延べ335万人おり、そのうち月に1度はブログを更新しているアクティブな利用者でも、約95万人にものぼるという。利用者は今後も増加の見通しであるが、特に、これまでホームページなどを開設したことのない一般ユーザー、なかでも若年層、女性の開設が急増しているという特徴が示されている<sup>(2)</sup>。こうしたことからもわかるように、電子メディアは、これまで書くことに消極的であった人々に対しても、魅力のある書くことの場となりつつある。そして、その魅力は、その場を支える多くの読み手であり、彼らとの双方向的な書くことにあると考えられる。実際、ブログを継続する動機は、自己をうまく表現できている、他者に自分のことがよく理解されているといった充足感にあり、その充足感を持たせる要因として、他者からのポジティブな応答が大きく関わっているといった報告もある<sup>(3)</sup>。

とは言え、一口に電子メディアにおける書くことといつても、さまざまな形態がある。右表に、現在、一般的なインターネットのサービスを示したが、これらのサービスは、情報伝達に双方向性をもたせるうえで、性質の違いが見られる。もつともこの分類には若干の注釈が必要であろう。まず、同期性とは書かれたものが即時に読まれる状況を指すが、その点では、メールや掲示板においても同期的に書き合うことは可能である。しかしながら、チャットとは異なり、書き込みが同期しなければコミュニケーションが進行しないというわけではない。また、協働性は、ここでは複数の参与者の書くことによって話題が進行する状況を指す。したがって、この性質に欠けるサービスは、本来、双方向的とは言えないのだが、この表で〈-協働性〉と示したものも、実際には、メールによる感想や掲示板の併用、あるいはブログのコメント機能の利用によって、応答が得られるような機構を備えているのが通常である。しかし〈+協働性〉としたサービスとは異なり、応答を前提に書かれているわけではなく、むしろ応答を期待して書かれていると見えることができよう。さらに、匿名性については、基本的には、ここで取りあげたすべてのサービスにおいて表われ得る性質である。ただし、メールやメーリングリストにおいては、相手を特定できる何らかの管理がされているという点で、他のサービスよりも匿名性の度合いは低いと言える。

このように、電子メディアにおける双方向性は、非同期性・匿名性という共通性をもちながらも、

	同期性	協働性	匿名性
メール	-	+	-
メーリングリスト	-	+	-
掲示板	-	+	+
チャット	+	+	+
メールマガジン	-	-	+
ホームページ	-	-	+
ブログ	-	-	+

参与者が書き手と読み手という役割を相互に転換しながら対等に情報交換を行う（〈+ 協働性〉）協働性の強いものと、基本的には書き手と読み手という役割分担のもとで、ある程度まとまった情報伝達に対して読み手からの反応を期待するといった（〈- 協働性〉）応答性の強いものとに識別できる。もっとも、協働的な情報交換がなされるためには、そもそも他者からの応答がなければならず、その意味で、協働性はすでに応答性を充足している。しかしながら、協働性は、ある合意形成を目指しながらコミュニケーションに参与するといった、話すことばにおける双方向性に類似した性質を書くことに付与しており、応答性は、これまで出版メディアの特権であった、多数の読者からの応答に向けて書くことの一つの機構を具現している。そして以下に述べるように、これらの性質が、書くことの課題をそれぞれ浮き彫りにしていると考えられるのである。

## 2.2. 協働性と書くことの課題

電子メディアにおけるコミュニケーションの協働性について、そうしたやり取りの場が、いわゆる公共圏として機能し得るのではないかという期待がある。公共圏とは、ハーバーマスが論じた、公的領域からの公権力に対する、私的領域からの公論（世論）を立ち上げるための公共的な場である。ハーバーマスは、17～18世紀のサロンやカフェ・ハウスなどの例を取りあげながら、公共圏は、（1）参与者の社会的地位を度外視して社交できる対等性、（2）国家的権威による解釈に縛られずに議論できる自律性、（3）誰もが議論に参加できる開放性といった制度的規準を持つと述べる<sup>④</sup>。このような公共圏として電子メディアが機能する可能性については、電子メディアにおける情報交換・意見交換が具体的な市民活動へと発展・結実していくことなどがあげられる<sup>⑤</sup>。

しかしながら、電子メディアにおける公共圏の可能性に対して、匿名性がその成立の阻害要因になるとする見方もある。匿名性そのものは、公共圏の形成においては、対等性を保証する手段になり得るのだが、それが逆に、無責任で自己充足的なコミュニケーションを招くとする見方である。たとえばドレイファスは、インターネットのように情報が偏在した空間では、「誰もがどこでもいつでも、あらゆる事に対して意見を持つことができる。どこでもない場所から掲示板に意見を書き込む匿名の素人の、一様に根無し草的な意見に対して、自分のコメントを書き込むことに誰もがやっきになっているのである。このようなコメントーターたちは自分たちが話している問題にいかなる立場も知らない。実際、ネットの遍在性は、そうした局地（ローカル）的な立場をどうでもいいものに思わせるのである。」<sup>⑥</sup>と述べている。

実際、インターネットにおける議論では、フレーミング（flaming）と呼ばれる、些細なきっかけから感情にまかせてお互いを罵倒しあうなどの荒れた議論が起りやすくなると言われている。ウォレスは、匿名性により発言が自己の責任にならないために、社会慣習や制約による抑制が弱まることから、このような攻撃的な行動は、引き起こされる可能性が生じると述べている<sup>⑦</sup>。こうしたフレーミングを回避する方法として、メッセージの意味内容を解釈するための社会的な手がかりをフェイス・マークのような記号でメッセージに付け加えること<sup>⑧</sup>や、社会的な手がかりをことばで伝え合うだけの時間的な余裕を持ってコミュニケーションを行うこと<sup>⑨</sup>などが指摘されているが、一方で、非言語的な手がかりが欠如するからといって、非抑制的な行動が助長されるわけではなく、むしろ敵意のある言語メッセージを用いるかどうかが、攻撃的な行動だと受け取られることに強い影響を及ぼすといった報告もある<sup>⑩</sup>。こうした現状を踏まえるならば、電子メディアにおける協働性を有益なものとするためには、それをたんにコミュニケーションに参与する者同士の関係を調節するような表現技術の問題に還元す

ること以上の何かを考慮する必要がある。

鈴木謙介は、インターネットにおける自己充足的な議論がエスカレートしていく状況を、〈カーニヴァル化〉というキーワードで読み解いている<sup>(11)</sup>。鈴木の議論の基底にあるのは、以下のような自己のありようの変容である。ポスト・モダンの社会においては、最終的に目指すべき目標や規範が欠落している。それらは多様化し、それをどう描くかは自己の選択の問題となっている。しかしそこで何を選択すればよいのかを決定する規準となる自己像もまた、管理されたデータとして情報社会に遍在している。したがって、自己の選択のありようは、その都度のデータベースへのアクセスによって、さまざまに立ち上ってくる。このようにあらゆることがその場限りの自己へと再帰する事態は、他者との関わりにおいても起こってくる。すなわち、他者との関わりは、確固とした共同体の構築を目指したものではなく、その場限りのつながりの感覚を自己が得られることを志向するだけのものなのである。

こうした洞察は、公共的な議論の可能性について、匿名であるかないかでとらえようとする見方よりも、より先鋭的に問題を浮き彫りにしている。なぜなら、公共的な議論が匿名性に起因するというとらえ方は、匿名としての自己と実名としての自己とが対置されている。したがって、この問題を解決するには、実名としての自己を議論に持ち込むか、実名としての自己に照らして匿名としての自己の反省を促すなどの手立てが考えられるだろう。あるいは、いわゆるチケットとして示される、送信する前にメールを読み返すことであるとか、感情的な気分のときには冷静になる時間的な余裕を見て議論に参加するなどという構えも、電子メディアにおける書くことに、反省的な局面を持たせようとするための促しだととらえることもできる。しかしながら問題は、匿名としての自己か実名としての自己かということも自己の選択によるとき、その選択が依拠する規範が欠落しているという点にある。なぜなら、かりにそこで依拠する規範もまた、多様な選択肢の一つにすぎないからである。鈴木が指摘したのは、そうした事態において、その場限りの自己に依拠し、それを消費する充足感を求める個人のありようなのだが、それは自己に再帰し続けるのみである点で、社会との関係が断たれた自己であるといえる。そしてそのような自己のありようが、社会の公共性を危うくさせるのは、明らかであろう。

では、どうするのか。おそらく個人が依拠すべき規範を回復していくことが考えられるが、だがそれは、外部から特定の規範を持ち込めばよいというわけではない。なぜなら、その規範が正しいという保証はどこにもないからである。しかしながら、だからといって個人が社会から逃れることができない以上、規範を空所化したままにしておくこともできない。少なくとも、西研が述べているように、規範を協働的に構築しようと試みることは必要であろう。

社会化された人間のあり方を考えるさいに、「理性で感情や衝動を押さえ込む」という“押さえ込みモデル”的なイメージがあります。パーソンズもそうでしょうし、フーコーは「内面に自己を監視する視線を植え込むことで近代的主体は成立する」というふうにいう。カントもフロイトも“押さえ込みモデル”です。しかし集団のメンバーとしての経験が楽しかったり大切だったりする経験を積んでいけば、「集団においてフェアにふるまうこと」「ルールに従うこと」は、嫌なこと我慢することではなくなる。むしろ誰かのフェアでない行為に対してとても嫌な感じをもつ。このように、「集団のなかでのメンバーの一員であること」が自分のなかに根付くと、それじしんが一つの情緒-道徳感情のようなものですね-によって支えられることになる。「これは正当だ、しかしこれはアンフェアだ」というルール感覚ができるわけです。

最初は、みんなでいっしょに何かのゲームをやると楽しい、というようなところからはじまるんでしょうね。さらに、集団の活動をつまらなく感じたり何かトラブルが起つたりしたときに、みんなに提案してルールを変えられた、そうやって集団をもっと気持ちよくできた、という経験。この経験がメンバーシップの感覚にとつてはカナメだと思います。その経験がないと、集団はいつも「同調すべきもの」「我慢して従うしかないもの」

ということになってしまう。<sup>(12)</sup>

このような観点から、国語科教育において協働的に書くことは、メンバーシップの感覚を得るために経験の場としてとらえることができる。そして、そこでの書くことは、およそある文章を書き終えるための単線的な過程ではない。むしろ、書くことは、それを終えたときに完結するものではなく、他者の書き込みによって次の書くことが触発される。したがって、その一連の書き合いの過程は、それぞれの書き手にとっては、書き直しのプロセスであるのだが、同時に相互交渉的に協働によって創造・構築される書くことである。ここでのポイントは、おそらく、書き直しという反省的局面において、他者の書くことをいかに関わらせ、その関わりの中から、他者と共有し得る新たな知見と書くことの規範の創造・構築をいかに促していくかということにあるだろう。このような書くことの経験から、電子メディアにおける書くことという社会的・公共的な営みと地続きの地平の構成が期待できるのではないかと思われる。

### 2.3. 応答性と書くことの課題

携帯電話の普及によって、いつでもどこでもコミュニケーションが可能になってきているが、その一方で、携帯電話を手元から離せない、携帯電話がないと不安になるなどのいわゆる「ケータイ依存症」といったことが指摘されている。もっとも、逆に携帯電話を利用する人ほど孤独感が少なく外向的だとする調査<sup>(13)</sup>もあり、それが携帯電話の一般的な利用傾向だとは言いにくい。むしろここで注目したいのは、そうした「ケータイ依存症」の一般性ではなく、そうした視点からとらえることが、コミュニケーションにおける応答性の問題の所在を明らかにしているという点である。

大澤真幸は、アニメ『ほしのこえ』における携帯電話の役割に言及しながら、若者のコミュニケーションで希求されているものは近接性の感覚であると述べている。そこでは「情報内容はほとんどどうでもよく、互いに接続しあっていくということ自分が確認され、享受されている」<sup>(14)</sup>。しかしこのことは同時に、「接続しあっていないかもしれない」という不安と背中合わせの事態もある。たとえば香山リカは、その心性を次のように描いている。

「ケータイがすべて、メールがすべて」と思い、「なかつた時代なんて信じられない」と言う彼ら彼女らは、「レスをしない人は超失礼」と怒ったふりをしながら、「どうして私が超失礼なことをされるんだろう、私が超失礼なことをしゃったからじゃないか」といつもおびえている。メールのレスがなくても、手紙が来るかもしれないじゃないか、電話が鳴るかもしれないじゃないか、それらがなくても会って顔を見ればすべては解決するさ、といった他の回路すなわち逃げ道は、この子たちには存在しない。メールのレスが来れば好かれているし、来なければ自分は大切に思われていない。それだけなのだ<sup>(15)</sup>。

こうした近接性の感覚の希求とそれゆえの不安は、書くことによるコミュニケーションの成立が基本的にきわめて危ういものだという性格を明らかにしていると思われる。それを鮮明にしたのは、いつでもどこでもコミュニケーションの回路を開けるという近接性を持ちながらも、その回路の先が非近接的な他者であるという電子メディアの双方向性の構成のされたものにある。このようなとらえ方からすれば、話したことばの双方向性においては、他者との接続の難しさ、了解の難しさが、他者の現前によって隠蔽されているだけなのだと考えられる。したがって、2.1で触れた書くことの孤独も、こうした双方向性によって写像するならば、伝えたいことが了解されるために読者を虚構しなければならない孤独の前に、そもそもそのような読者と接続できないかもしれないという孤独との二重の孤独・不安としてとらえなおすことができるだろう。

北田暁大は、こうした了解の困難さから接続の困難さへという問題の変容を、公的な責任を持つ送り手と、私的に解釈する受け手との役割区分が前提となった意味伝達志向のコミュニケーションから、そうした役割区分が失効し、見られること、接続されること自体をめざす接続志向のコミュニケーションへの変容としてとらえている。

まず第一に、〈覗かれ〉系サイトにおいては、世界の事象を、一定の象徴的意味を持つテクストや表象へとまとめあげる編集の操作が存在しない。したがって、発信する情報を整序・統制しその効果に責任を持つ「作者」「送り手」や、表象を読み解く「受け手」といったものも当然のことながら、存在しない。そこでは、意味内容を持ったメッセージや物語が伝達されているのではなく、端的にコミュニケーション（たれ流し）が、意味やメッセージを介することなく次なるコミュニケーション（覗き見る）へと接続されているにすぎないのだ。<sup>(16)</sup>

ここで北田が取りあげているのは、2.1で協働性が強いとしたコミュニケーション空間である。したがつて、2.2で指摘した、公共的なコミュニケーションが依拠する規範の欠如といった問題は、意味伝達志向のコミュニケーションにおいて問うことのできる問題であって、接続志向のコミュニケーションにおいては、その問題性そのものが無効化されていると見ることもできる。なぜなら、接続志向のコミュニケーションにおいては、どのような形であれ、接続されればよいのであって、それに参与する者の間に目的や規範の共有は必要ないからである。

しかしながら、こうした変容を踏まえて、もはや意味伝達志向のコミュニケーションの成立を望むことは無意味であるということにはならないだろう。むしろ、そうした状況からコミュニケーションの回復を促すことが国語科教育の役割であると考えるならば、接続志向のコミュニケーションが明らかにした、接続への欲求とその困難さを踏まえたとき、接続することを意味伝達の志向性にどのように関わらせればよいのかを問う方が重要であると思われる。それはたとえば、これまで書くことにおいて、どのように伝達すべき意味を構成するかということの前に、その書かれたことがたしかに接続される場、すなわち読まれることをじゅうぶんに保証してきたのだろうか、また、逆に読まれることを前提にして、書くことを促してきたのだろうか、さらには、実際にどのように読まれたかということを関わらせて次の書くことを促してきたのだろうかといった問い合わせである。

### 3. コミュニケーションにおける書くことの機構

#### 3.1. コミュニケーションの偶発性

これまで双方向的な書くことの社会的なコンテクストとして、電子メディアにおける双方向的な書くことの様相を考察してきた。そこで明らかになったことは、双方向的に書くことを成立させるための、いくつかの課題であった。すなわち、コミュニケーションの協働性における公共的な意味伝達とその了解を支える規範の危うさと、応答性における接続の危うさをどう回復するかという課題である。さらに2.3の最後にみたように、それらはベクトルの異なる書くことの課題としてではなく、相互に連関する課題としてとらえる必要があるのではないかと考えられた。そこでこれらの課題を踏まえて、コミュニケーションと書くこととの相関をとらえてみたい。

一般に、よく知られたコミュニケーション・モデルとしてシャノンのモデルがある。このモデルは、情報源 (information source) → 送信機 (transmitter) → チャネル (channel) → 受信機 (receiver) → 目的地 (destination) といった情報が伝達される単線的なモデルである<sup>(17)</sup>。このモデルはもともと電気通信

を想定したモデルであるが、言語コミュニケーションを説明する図式としてもよく利用されてきた。すなわち、情報の発信者は、伝えたいメッセージを、音声や文字などによる記号に変換して話したり書いたりして送り出す。その情報は特定のメディアを経由して、受信者のもとに届けられるが、そこで受信者は記号を解読してメッセージを理解するといった図式である。

しかし、このモデルは、先に示した課題に迫るためには不都合なモデルである。第1に、このモデルでは、発信者と受信者との間で、伝達内容と記号との間の変換コードが共有されている。しかしながら、実際には、コードが共有されている保証はない。かりに言語的なコードが共有されていたとしても、ホールが示したように、発信者によるメッセージの記号化(encoding)と、受信者による記号の解読(decoding)とは、それぞれの社会的・文化的・政治的なコンテクストとの関わりから非対称的な行為となる<sup>(18)</sup>。このようにシャノンのモデルは、非対称的な行為からどのようにしてコミュニケーションが成立するのかを説明しない。したがって、このモデルでは、どのようにしてコード・規範が生成されるのか、あるいは生成されたと了解できるのかを考えることができない。

第2に、このモデルでは、発信者と受信者とが、情報の伝達経路によってはじめから結ばれている。したがって、そもそも発信者と受信者とは、どのようにして接続するのか、あるいは接続されたと了解できるのかを考えることができない。すでに考察したように、書くことは、ただ書き終えただけではコミュニケーションが保証されない。また、電子メディアにおいては、予想していなかつた読み手からの応答が得られることがある。もちろん、書くことは、それが読まれ得るものとして、何らかの読み手を想定して行われている。しかしながら、そこで予想外の他者と実際にコミュニケーションを継続するかどうかは、その応答があつてはじめて俎上にのぼる問題である。なぜなら、その応答によってはじめて、書き手は自己の書くことがコミュニケーションであったことを知ることができるからである。

このように了解と接続とが不確実なコミュニケーションの性質を、ルーマンは、ダブル・コンテンジエンシーと呼んでいる。

各人の行為がコンテンジエンシーに富み、それゆえ各人は別様にも行為しるし、また各人は、自分自身がそうしていることも相手がそうしていることも知っており、またそのことを考慮しているのであれば、そもそも自分自身の行為が相手の行為のなかに接点(と同時に相手の行為との接続で与えられる自分自身の行為の意味)を見いだすことは、なによりも不確実なのである。というのも、自分自身でみずから行為を決定することは、相手も自分自身でみずからの行為を決定することを前提とし、逆のばあいも同様であると考えられるからである。<sup>(19)</sup>

ここでルーマンが述べていることを手がかりに、コミュニケーションにおける書くことを描いてみるなら、次のようにとらえることができると思われる。書くことはそもそも偶発性を伴った行為である。なぜなら、書くことはかならず、書かないことや別の表現をすることなど、別の可能性を伴った地平における選択の結果としての行為だからである。したがって、読み手の側に目を転じれば、彼が応答的に書くことは、二重の偶発性を伴った書くこととなる。なぜなら、読み手にとって書くことは、書き手への応答であるという点で、書き手の書くことに依存しているが、このとき書き手の書くことが偶発性を伴っていることを知っている。したがって、なぜそれが書かれたのかを明確にできないままに、自らの書くことを選択せざるを得ない。そのためこの選択は、必然的な根拠を持ち得ない、試行的・偶発的な書くこととなる。

このようなコミュニケーションのとらえ方から見えてくるのは、書き手の意図を、書かれたものから読み手が了解することによって伝達が成立・完了するといった図式ではない。むしろ、双方、それぞ

れが書くことを偶発的に繰り返しているのであり、にもかかわらず、あるいはそれゆえ、そこにコミュニケーションが構成されているといった様相である。そして、2.3で述べた接続志向のコミュニケーションもまた、これと同様の様相としてとらえることができるだろう。すなわち、そこでは、それぞれが接続を試み続ける限りにおいて、コミュニケーションが成立しているのである。

### 3.2. コミュニケーションと書くこととの相関

ところで、このように書くことを繰り返し続けることによって構成されるというコミュニケーションの性質を、ルーマンは、マトゥラーナ・ヴァレラが提唱したオートポイエーシスから着想している。オートポイエーシスとは、構成素を再生産し続けることによって、システムの位相的領域を構成するという生命システムの特質である<sup>(20)</sup>。すなわち、オートポイエティックなシステムは、構成素の再生産という閉鎖的に作動するシステムである。また、あらかじめシステムの領域が規定されているのではなく、作動によって平衡的なシステムの領域が立ち現れてくる。さらに、閉鎖的に作動しているということは、システムの外部と関係的に作動していることを、システムにおいてはとらえられないということを意味する。ルーマンは、こうした再帰的な閉鎖性に注目して、社会システムをコミュニケーションを構成素とするオートポイエティックなシステムであるととらえる。そして、その意味で、社会システムにとって人間は外部にある。

それでは、こうしたオートポイエーシスによるとらえ方にしたがい、コミュニケーションと書くことを別の位相に峻別したとき、コミュニケーションと書くこととの相関はどのようにとらえることができるであろうか。ルーマンは、「コミュニケーションは、自我（情報の受信者を指す：稿者注）が情報そのものの選択と伝達の仕方の選択という二つの選択を区別でき、この差異を自我自身で処理することができるということによって成立する」<sup>(21)</sup>と述べる。情報と情報伝達の仕方との差異は、受信者が発信者を観察することによって了解されるが、3.1で触れたように、発信者は、受信者がそうした観察を行うことを予期している。したがって、発信者は、受信者として過去に観察した情報と伝達の仕方との差異を活用して、コミュニケーション過程がうまく処理されるように振る舞うことができる。また、この振る舞いは、受信者の観察によって駆動した、応答への情報処理に引き継がれていく。このように、個々の参与者における閉鎖的な行為が、次の行為を生成する、この作動の継続がコミュニケーションを構成するのである。

ここで本稿において重要な点は、3点ある。第1は、行為の作動を観察することによって、コミュニケーションの社会的・規範的な様式の構成とその獲得の機構を描くことができる点である。もちろん、コミュニケーションの生産の機構をとらえることは、それがオートポイエティックに働いている以上、十全にとらえることはできない<sup>(22)</sup>。つまり、その機構を行為としてとらえることは、観察によって縮減された図式でしかない。しかし少なくとも、こうした観察による接近から、その社会システムの輪郭として、コミュニケーションにおける選択の社会的・規範的なコミュニケーション様式が明らかになると考えられる。第2は、社会的・規範的な様式の適用の問題である。コミュニケーション的行為を通じて社会的・規範的な様式が獲得されるとしても、その様式にもとづいて行為することは、コミュニケーションを十全に構成するための一側面にすぎない。なぜなら、この様式は、コミュニケーションにおいてはその参与者の予見としてしか働いていないからである。むしろ、コミュニケーションは偶発性を伴つたものであり、それによって作動する。したがって、重要になるのはむしろ、「あらゆる種類の偶然、攪乱、「ノイズ」に敏感になる」<sup>(23)</sup>ことである。こうした偶発性に敏感になることが、コミュ

ニケーションの作動を促すとともに、そうした偶発性に対応できる新たな様式の創造につながる。

そして第3は、この位相からコミュニケーションをとらえる限りでは、そこに参与者個々の意識は関わってこないという点である。オートポイエーシスは、再帰的に作動することによって自己の領域を閉鎖的に形成するシステムの特性である。したがって、社会システムがオートポイエティック・システムであるというとき、意識といった心的システムは、社会システムの環境に位置する。こうしたとらえかたは、電子メディアにおける匿名によるコミュニケーションが、コミュニケーションとして成立していることを想起すればわかりやすいだろう。

ただしここで注意しなければならないのは、システムと環境とが対置されているわけではないということである。つまり、両者の領域区分は、観察による恣意的なものである。なぜなら、オートポイエティック・システムは、その作動によって位相的にシステムの領域が形成されるのであって、もともとシステムの内部と外部といった領域区分が客観的に存在しているわけではないからである。しかしながら社会システムと心的システムとは、まったく関連がないというわけでもない。むしろ、相互にシステム／環境の関係を持ちあっており、それゆえ相互に関連しあっているのである。ルーマンは、こうした事態を「相互浸透」と呼んでいる。

あるシステムと他のシステムとが互いに他方の環境となっているばかりに、あるシステムが、他方のシステムが新たに編成するために、そのシステム自体の複合性（そしてそれにもなう、未規定性、コンテンジエンシーおよび選択の強制）を提供するばかりを浸透（Penetration）と名づけることにしたい。まさにこの意味で、社会システムは「生体の活動」（Leben）を前提にしている。こうした浸透と名づけられる事態が、双方のシステムで交互に見いだされるばかりに、したがって、双方のシステムがそれぞれそのシステムのすでに構成された複合性を他方のシステムに提供しその複合性を豊かにすることが交互におこなわれることによって、こうした二つのシステムが交互に他方のシステムの成り立つ前提条件となっているばかりに、相互浸透（Interpenetration）がみられることになるのである。<sup>(24)</sup>

この概念が表わしているのは、相関するシステムの一方が作動するとき、他方のシステムの作動やそこからの影響は見えてこないということ、したがって、一方のシステムが他方のシステムを制御しているのではないということである。社会システムの位相からコミュニケーションの作動をとらえようとするとき、その作動に参与者の意識は関わってはいる。そのことは、コミュニケーションが人間の行為のように記述されていることからも明らかである。にもかかわらず、そのシステムの作動に人間の意識を関係づけることはできないのである。

したがって、コミュニケーションと書くことを安易に因果関係としてむすぶのではなく、それぞれの位相から多視点的にその作動をとらえることが、両者の相関をとらえるうえでは重要であろう。たとえば、2.3で示した接続志向のコミュニケーションについて言えば、コミュニケーションの位相においては無意味な書くことの集積に見えるものが、書くことの位相においては接続の感覚が意識されることによって参与者は相互に結ばれているのである。

### 3.3. 書くことの機構

それでは、コミュニケーションとの相互浸透を踏まえて、書くことの位相からその行為をとらえるならば、どのようにその作動をとらえることができるだろうか。3.2で述べたように、コミュニケーションの位相から見たとき、それは応答を起点に作動するものであったが、書くことにおいては、むしろ応答がない状況で書くという行為をとらえる必要がある。もっとも、こうした書くこともまた、偶発的な

環境に対する応答的なものだととらえられなくもない。なぜなら、たしかにその環境において、先行する書くことは生じていない。しかしながら、書くことが書かれないこととの間の選択であるならば、先行する書くことの現われていない環境もまた、偶発性を伴った状況だと言えるからである。少なくとも書き手にとってそう感じられるから、自らの書くことを立ち上げる契機がそこで得られるのだと考えられる。国語教育において、たとえば小森茂が相手意識・目的意識・場面意識・方法意識・評価意識<sup>(25)</sup>といったものを双方向的な表現活動において取りあげるのも、書き手の環境に対する応答的な意識を書くことの契機とするための促しだとらえることも可能であろう。

書くことは、端的に言えば、自己の思考をことばという記号に変換する過程である。では、この過程は、どのようにとらえることができるだろうか。河本英夫は、心的システムの位相から、そのオートポイエティックな作動における意識の分化を描いている。河本は、心的システムの構成素を、ルーマンの意識のオートポイエーシス論を踏まえて「思考」だとする。心的システムは、思考の再生産により自己の領域を形成する。このとき、思考は、思考について思考することもできる。この自己言及的な作動は、心的システムの高次の作動である。この作動は、いわゆる反省と呼ばれてきたものであるが、その作動が継続する機構を、河本は観察システムと呼んでいる<sup>(26)</sup>。観察によって生成された思考は、心的システムの作動による思考とは異なり、自覚的にその領域を区別する思考である点で「表象」と呼ぶことができる。そして、社会システムの位相に現われるコミュニケーションからの浸透によって獲得された言語は、この表象化の作動を安定させる。

ところで河本が描いている反省的な思考の過程において注目されるのは、それを自己意識の作動としてもとらえることができる点である。すなわち反省的な思考によって領域区分される自己は、他者に対置された自己であるが、その自他関係は、コミュニケーションとの相互浸透から得られるととらえられる。

社会システムの作動において、コミュニケーションを産出するさい、人は一般に社会システムに相互浸透する環境である。そのため個々のコミュニケーションの産出をつうじて他者には自明ななかで出会いつけている。コミュニケーションが、自己についてのコミュニケーションや他者についてのコミュニケーションをつうじて形成する人称的な自己や他者は、コミュニケーションとともに、社会システムに浸透する人間として自明ななかで理解されている。コミュニケーションの産出において、この意味での他者には、自明ななかで出会いっているのである。しかし心的システムへと経験が転換した途端に、この自明であった他者は、すべて環境の側に区分されている。そして他者についての思考を産出すれば、いずれも自己の構成素となる。心的システムにおいて、あの自明であった他者は、どこにも存在しない。<sup>(27)</sup>

このような河本の考察を踏まえれば、心的システムにおける思考する自己と、観察による対他的な自己とは、ミードの言う主我(I)と客我(me)との差異としてとらえることができるだろう。

「I」は他者の態度にたいする有機体の反応であり、「me」は人が自ら想定する他者の態度の組織化された組合せである。他者の態度は、組織化された「me」を構成し、次に、人はその「me」にたいして、「I」として反作用する。<sup>(28)</sup>

このようにミードは、他者の期待にもとづく客我としての自己に対する反作用として主我をとらえている。ここでの客我は、思考する自己を自己言及的な作動によって表象した、他者に対置された自己に適合する。そして、客我に対する反作用としての主我は、オートポイエーシスにおいては、心的システムと観察システムとの自己のずれを表わすと考えられる。ミードの自我論とのこうした重ね合わせによって、この自己のずれがどのような作用をもたらすかが見えてくる。すなわちミードにとって、主我的反作用は客我への適応として表われるが、そこでの主我と客我とのずれは、自己の創発の契機である

同時に、そうした自己の変容による影響として、その自己の所属する共同体の変容をも促すものである。

この自己変容の作用構造と思考を表象化する記号作用の構造との相似性は、ワイリーが示した自我的構造を手がかりにしてとらえることができる。ワイリーは、パースが示した記号-解釈項-対象の三極構造をとる記号過程<sup>(29)</sup>が、それと相似的な、話者-聴者-反省的な話者の三極構造に入れ子された構造としてコミュニケーションをとらえる。そのうえで、パースの記号の構造とミードの自我的構造とを、〈アイ-ユー-ミー〉の三極構造に統合している。そして、この構造において、パースに〈アイ〉と〈ユー〉との間の対話性が、ミードに〈アイ〉と〈ミー〉との間の対話性がみられるとしている<sup>(30)</sup>。

西垣通は、心的システムと観察システムとの相互作用を、やはりパースの三極構造に適用して、記号を心的システムと観察システムとの相互作用、解釈項を観察システムから抽出される情報、対象を心的システムに再帰的に生成されるパターンとしての原 = 情報ととらえる。そして、ここでの情報の抽出過程が仮説推量(abduction)の形式をとるかゆえに、観察システムが原 = 情報をとらえ得る保証はないにもかかわらず、その再帰的な作動が、無限の解釈過程によって対象に迫る科学的な認識活動になるととらえている<sup>(31)</sup>。西垣が示した観察システムの作動は、ワイリーのモデルで言えば、〈アイ〉と〈ユー〉との対話性に着目したものだと言える。これは、そもそも観察システムの作動であって、心的システムの作動を表象化する過程である。したがって、それによってとらえられる対象としての原 = 情報は、心的システムの作動によって生成された思考そのものではない。それは、表象化の枠組みを通してとらえられた思考である点で、ミードの用語で言えば、客我にあたると考えられる。また、この観察における解釈活動は、仮説推論によるという点で、その再帰的作動によって対象に迫る必要があるのだが、そこでの推論は、表象化の枠組みの仮説的・選択的な適用によって通常はなされるはずである。したがって、再帰的作動では、その枠組みそのものの変容の可能性は保証されない。むしろその枠組みを変容するためには、それ自体が問われるような作動が必要になると考えられる。それは、観察そのものをさらに観察する自己言及的作動であって、先に触れた解釈としての観察よりも高次の観察である。西垣は、この高次の観察を「自己観察」と呼んでいる。自己観察は、解釈がその対象から遊離するのを、観察を観察することによって制御する<sup>(32)</sup>。しかし同時に、そこには〈アイ〉と〈ミー〉との間の対話性から引き起こされる創発性があると考えられる。すなわち、観察の作動と、観察を観察することによって得られた表象化された観察の枠組みとの間のずれが、その観察の枠組みの帰納的な創発を作動するのである。

ワイリーは、「〈アイ-ユー-ミー〉構造はデカルトの中心化の度が過ぎるエゴとポスト構造主義の消去もしくは除去されたエゴとの中間位置を差し出している。それは非現実的に中心化されていないし、また不必要に還元的にもなっていない。社会的に孤立していないし社会に吸収されてもいない。むしろ社会とバランスがとれて相互浸透しあう関係にある。それは実行者を記号の三極構成の全体に分散させるが、それでも人間の実行者の存在を認めている」<sup>(33)</sup>と述べている。本稿で考察したように、それは、コミュニケーションの位相、自我的位相、記号過程 = 観察の位相間の相互浸透の様相である。そしてそれはまた、書くことの双方向的な作動の様相を示してもいると思われる。すなわち、書くことは、自己の思考を観察し、ことばへと表象する作動である。それは、自己の思考を解釈すると同時に、その解釈を反省的にとらえなおすというように、螺旋的に繰り返される作動である。この記号過程の位相における書くことは、自我的位相における自己意識からの浸透を受けている。他者に対置された社会的自我は、目的や読み手などの意識として書くことに浸透する。すなわち、書

くことにおいて思考をとらえることばの選択が、それが他者に理解可能だと期待されることばに方向づけられるのは、この浸透関係からとらえることができる。さらにまた、その期待は、コミュニケーションの経験から浸透する、自己の書くことが他者の応答へと開かれた書くことであるという期待なのである。

#### 4. 双方向性に着目した書くことの指導

本稿において明らかにしてきたことは、書くことが、書き手の内部において、自己の思考をことばによって表現することだとしても、そこには、コミュニケーションあるいは自我の位相における双方的な関係性・対話性が書くことに浸透しているということである。このような書くことの双方向性に着目したとき、国語科教育における書くことの指導のありようについてどのような視点が見いだせるかを、最後に整理しておきたい。

##### 4.1. コミュニケーション活動を書くことに生かす

書くことがコミュニケーションと相互浸透しているということから、書くことそのものが双方向的であるというとらえ方ができる。したがって、書くことを、実際の双方向的な活動の場に埋め込むことは、書くことの活性化を図る一つの手段になると考えられる。たとえば、読み手を意識して書くという指導場面において、その意識の形成には、コミュニケーションに参与した経験が浸透している。したがって、このとき実際のコミュニケーション活動という状況に書くことを置くことは、それによって自己の書くことが読み手の実際の応答に対置されるということである。すなわちそれは、書くことにおける読み手の意識化、あるいはその読み手との対話にもとづいて書くというその自己の心的過程を外化・視覚化する手だてだと言つてもよいであろう。これは、これまで自己内対話あるいはメタ認知としてとらえられてきた自己言及的な書くことの機構でもある。

また、このように応答的なコミュニケーション活動を書くことに生かそうとするのであれば、そこで読み手の応答は逆に、書くことへと内化される必要がある。したがって、書くことの事後に相互交流といった双方的な場面を設定するよりも、その応答を手がかりに自己の書くことをとらえなおし、書き直すといった、書くことの過程に生かされるようなコミュニケーション活動の設定が必要だと考えられる<sup>(34)</sup>。さらに、このようにコミュニケーション活動を書くことに生かすということを、書くことの過程により密接に関連づけようとするならば、協働的なコミュニケーション活動を書くことに生かすということが考えられる<sup>(35)</sup>。というのも、フラワー・ヘイズが示したように、書くことの過程は、たえず自己に観察されている<sup>(36)</sup>。したがって、協働的なコミュニケーションから、書くことのアイデア・様式などの選択の手がかりを得ながら書きすすめていくことは、書くことの過程における自己言及的なとらえなおしを活性化する手だてになると考えられる。そして、このような書くことは、他者を位置づけ、他者に位置づけられながら書くということであり、おそらくそうした協働によるつながりの感覚は、公共的なコミュニケーションに参与する構えを育てることにもつながっていくのだと思われる。

##### 4.2. 位相差を踏まえて多視点的に書くことを評価する

書くこととコミュニケーションとが異なる位相に構成されるということは、必ずしも自己の書くことが他者に了解されることによってのみコミュニケーションが継続するとは限らないことを示している。たと

えば、電子メディアのコミュニケーションにおいてよくみられるように、自己の思想を明確に表明したとしても、それがコミュニケーションの位相においては他者への挑発として機能することもある。あるいは齋藤孝は、ディベート指導において自己の価値判断と実際に主張される論理構成とが乖離することを危惧している<sup>(37)</sup>が、これもまた、コミュニケーションが自己の価値判断とは別の位相において構成されるということに起因している。したがって、学習においては、自己の書くことをそれら二つの位相から観察することが、重要になると考えられる。たとえば、「私は、何を伝えるためにどう書いたのか」という自己の書くことを振り返るとともに、「他者は、私の書いたものから何を了解しているのか」「私の書いたものは、他者のどのような思考・感情を引き出したのか」といったコミュニケーションにおける自己の貢献と対照させることから、「では、どう書けばよかつたのか」という自己の書くことに対する評価が引き出せると思われる。したがってこのような自己評価においても、他者に読まれ、応答されるという場面を設定することは重要になってくる。また、ここでの自己評価から引き出される自己の書くことに対する知見は、獲得された書くことの規範・様式として、次の書くことにおいて実際に生かされる必要がある。たとえば、こうした自己評価をポートフォリオとして蓄積し、次の書くことに展開・活用する場面を持つといったことも重要であろう。

#### 4.3. 書くことの規範性と創発性の獲得を図る

4.2で述べたように、位相間の観察の差異から書くことの様式が獲得されるのであれば、書くことの技術を模倣的に習得させようとするだけでは、書くことの学習としてはじゅうぶんではないことが指摘できる。3.2でも触れたように、たしかにコミュニケーションを効率化するための様式が、書くことの技術として規範化されているし、それが経験則である以上、それが有効に働く確率は高い。したがって、書くことの技術の獲得を図ることの重要性は否定しないが、その場合でも、その技術がどういうコミュニケーション状況に有効だと考えられる技術であるのかという認識を持たせることは重要であろうし、そのためにそのコミュニケーション状況で利用させる活動が考えられてよい。しかしながらコミュニケーションの偶発性は、その技術がかならずしもそのコミュニケーションを支えるように働くとは限らないことを示している。むしろ、コミュニケーションにおけるおののの書くことから、オートポイエティックにコミュニケーションの輪郭があらわれてくるというとらえ方を踏まえるならば、そこで構成され獲得されている創発的な書くことの様式を注意深く観察し、それを共有させていくことが授業者には求められるだろう。コミュニケーションに参与する中で、自己の持つ書くことの様式のレパートリーを調整的に適用し続けることで、コミュニケーションの作動の継続を図ろうとすることが、コミュニケーション能力であり、双方向的な書くことの基底的な能力である。そして、書くことの学びは、規範的な書くことと自己表現との間にある。すなわち、そこで構成された書くことの様式を規範として共有しつつ、それが反省的な調整によって獲得された自己の書くことの様式であることを確認していく経験を積み重ねていくことが、書くことの学びであると考える。

#### 5. 結論と課題

本稿では、電子メディアにおけるコミュニケーションを活用した書くことの学習開発のための理論的な基礎づけとして、コミュニケーションと書くこととの相関の様相をとらえようとした<sup>(38)</sup>。結論として、コミュニケーションの位相と書くことの位相とを多視点的に観察する、反省的・創発的な活動を促す

ことが、書くことの学習においては重要であることを示した。また、書くことにおける観察を促すために、双方向的な書くことの活動を関わらせることが重要な手立てになることを指摘した。そして、電子メディアの活用は、そうした双方向的な活動を構成するための有効な手立てになり得ると考えられる。さらに付言すれば、ここで述べた書くことの指導のありようは、書くことのコミュニケーションにおける公共的な活動と表現における自己充足的な活動との間の乖離が問題視されている、今日の電子メディアにおけるコミュニケーションの課題に対する国語科としての取り組みの方向性でもあると思われる。

今後の課題としては、本稿で示した位相における作動の様相について、学習者の書くことの内実から確認していく作業があげられる。特に、学習者間の双方向的なやり取りが、学習者個々の書くことの変容にどのように関わっているのかを明らかにする必要があるだろう。また、そのさい、たとえば藤森裕治が指摘しているような「国語科として行われる教育的なコミュニケーション」の視点からとらえた位相領域の特性<sup>(39)</sup>も考慮する必要があるだろう。教室における学習としての書くことやコミュニケーションの活動は、真正の社会的な能力としての書くことやコミュニケーションの能力を育てようとするうえで、どのような影響があるのかを考慮することは、双方向的な書くことを生かした指導を有效地に機能させるうえでは重要になってくると思われる。

- (1) Ong, W. J., 1991 (原著 1982), 『声の文化と文字の文化』, 桜井直文ほか訳, 藤原書店, pp.210-224
- (2) 総務省, 2005, 「ブログ・SNS の現状分析及び将来予測」, [http://www.soumu.go.jp/s-news/2005/050517\\_3.html](http://www.soumu.go.jp/s-news/2005/050517_3.html)
- (3) 山下清美ほか, 2005, 『ウェブログの心理学』, NTT 出版
- (4) Habermas, J., 1994(原著 1962), 『公共性の構造転換-市民社会の一カテゴリーについての探究- (第 2 版)』, 細谷貞雄ほか訳, 未来社, pp.49-58
- (5) たとえば干川剛史は、阪神・淡路大震災や有珠山噴火災害などの救援ボランティア活動のため電子メディアが活用された例を指摘している。干川剛史, 2003, 『公共圏とデジタル・ネットワーキング』, 法律文化社
- (6) Dreyfus, H.L., 2002(原著 2001), 『インターネットについて - 哲学的考察 -』, 石原孝二訳, 産業図書, pp.104-105
- (7) Wallace, P., 2001(原著 1999), 『インターネットの心理学』, 川浦康至ほか訳, NTT 出版, p.159
- (8) 高本修治, 1993, 「パソコン通信におけるフェイスマークの機能」, 『日本語学』 vol.12-13
- (9) 高比良美詠子, 2000, 「コンピュータ・ネットワークを使った集団意思決定」, 坂本章編, 『インターネットの心理学 - 教育・臨床・組織における利用のために - (第 2 版)』, 学文社, p.106
- (10) 佐々木美加, 2005, 『協調か対決か-コンピュータコミュニケーションの社会心理学-』, ナカニシヤ出版
- (11) 鈴木謙介, 2005, 『カーニヴァル化する社会』, 講談社
- (12) 荻谷剛彦, 西研, 2005, 『考え方技術 - 教育と社会を哲学する -』, 筑摩書房, pp.96-97
- (13) 橋元良明, 1998, 「パーソナル・メディアとコミュニケーション行動」, 竹内郁郎ほか, 『メディア・コミュニケーション論』, 北樹出版
- (14) 大澤真幸, 2004, 「もう一つの「ハイデガー、ハバーマス、ケータイ」」, マイアソン, G., 『ハイデガーとハバーマスと携帯電話』, 武田ちあき訳, 岩波書店, p.111

- (15) 香山リカ, 森健, 2004, 『ネット王子とケータイ姫 - 悲劇を防ぐための知恵 -』, 中央公論新社, pp.177-178
- (16) 北田暁大, 2002, 『広告都市・東京』, 廣済堂出版, p.143
- (17) Shannon, C.E., 1948, A Mathematical Theory of Communication, *The Bell System Technical Journal*, 27
- (18) Hall, S., 1980, 1992, 1996, Encoding / decoding, Hall, S., Hobson, D., Lowe, A., and Willis, P. (eds.), *Culture, Media, Language*, Routledge
- (19) Luhmann, N., 1993( 原著 1984), 『社会システム理論・上』, 佐藤勉監訳, 恒星社厚生閣, pp.179-180
- (20) Maturana, H.R., Varela, F.J., 1991( 原著 1980), 『オートポイエーシス - 生命システムとはなにか』, 河本英夫訳, 国文社, pp.70-71 河本英夫, 2000, 『オートポイエーシス 2001』, 新曜社, p.101
- (21) Luhmann, N., 1993, p.223
- (22) Luhmann, N., 1993, p.259
- (23) Luhmann, N., 1993, pp.272-273
- (24) Luhmann, N., 1993, p.336
- (25) 小森茂, 1999, 「新しい国語科の目標と領域構成の在り方(2) - 「伝え合う力」 -」, 『教育科学国語教育』, 575
- (26) 河本英夫, 1995, 『オートポイエーシス 第三世代システム』, 青土社, pp.272-278
- (27) 河本英夫, 1995, pp.269-270
- (28) Mead, G.H., 1995( 原著 1934), 『精神・自我・社会』, 河村望訳, 人間の科学新社, p.215
- (29) Peirce, C.S., 1986, 『パース著作集 2[ 記号学 ]』, 内田種臣編訳, 勁草書房, pp.135-138
- (30) Wiley, N., 1999( 原著 1994), 『自我の記号論』, 船倉正憲訳, 法政大学出版局, pp.41-46
- (31) 西垣通, 2004, 『基礎情報学』, NTT 出版, p.87
- (32) 西垣通, 2004, p.93
- (33) Wiley, N., 1999, pp.45-46
- (34) 上田祐二, 2004, 「コンピュータを活用した相互評価による推敲指導の一考察」, 北海道教育大学語学文学会, 『語学文学』, 42
- (35) 牧戸章, 2003, 「「書くこと」と〈対話〉 - 協働〈コラボレーション〉で書くー」, 『実践国語研究』, 12月号別冊
- (36) Flower, L., Hayes, J.R., 1981, A Cognitive Process Theory of Writing, *College composition and communication*, 32
- (37) 斎藤孝, 2004, コミュニケーション力, 岩波書店, pp.11-13
- (38) なお、具体的な学習展開については、以下で試みたので参照されたい。上田祐二, 2005, 「インターネットを活用した文章表現の双方向的学習の実践-学習支援の手段としての有効性-」, 旭川実践教育学会, 『旭川実践教育研究』, 9
- (39) 藤森裕治, 2004, 「国語科コミュニケーションのマクロ・メゾ・ミクロ-学習者における予測不可能事象-」, 全国大学国語教育学会, 『国語科教育』, 56

(うえだ ゆうじ 本学助教授)